映画『ナビィの恋』に見る沖縄言語事情

戸嶋　祥子

１．はじめに

「沖縄若者事情―琉球・クレオール日本語試論―」（かりまた 2006）という論文を読み、最近の沖縄の言葉に興味を持った。この論文では、本土と沖縄の交流の中で最近の沖縄の若者は、伝統的な沖縄方言とも標準語とも違う独特の言葉、ウチナーヤマトゥグチを使い始めているということが述べられている。

そこで本稿では、沖縄が舞台になっている映画『ナビィの恋』（制作：1999 年／監督：中江裕司）をとりあげた。「映画」というメディアの中では、多くの人にわかりやすくするために標準語が使われているはずである。そのなかでどのくらい沖縄方言が使われているか、また、どのような言葉が使い分けられているかを調査したい。

２．調査対象

『ナビィの恋』は沖縄・粟国島を舞台にした映画で、沖縄でも公開され、多くの地元の人たちに受け入れられた人気のある作品である。監督の中江裕司は沖縄への移住者である。また、キャストに沖縄出身者が多いことから、現実に近い沖縄の言葉の使用状況が観察できるのではないかと考えられる。

ストーリーと主な登場人物は、以下の通りである。

〔ストーリー〕

仕事を辞めて東京から沖縄に帰ってきた奈々子を、ふるさとのナビィおばぁと恵達（けいたつ）おじぃが迎える。奈々子の帰りと同時に、この粟国島に見知らぬ一人のおじぃがやってくる。そのなぞのおじぃ・サンラーが島に戻ってきたことによって、ナビィの様子が変化していく。やがて奈々子はサンラーとナビィが昔の恋人同士だったことを知る。

同じ頃、奈々子の家には本土からの旅人と思われる福之助という青年が居候するようになる。

〔登場人物〕

人物（配役）	性別	年齢（推定）	出身地	キャラクター
①ナビィ（平良とみ）	女	80 代	沖縄	明るいおばぁ
②恵達（登川誠仁）	男	70 代	沖縄	ひょうきんなおじぃ
③サンラー（平良進）	男	80 代	沖縄	硬派、かっこいいおじぃ
④奈々子（西田尚美）	女	20 代	沖縄	明るい、元気
⑤ケンジ（津波信一）	男	20 代	沖縄	ひょうきん、奈々子の幼馴染み
⑥福之助（村上淳）	男	20 代	本土	好青年、旅人
⑦子供たち	男、女	6～12 歳	沖縄	いたずらっこたち

３．分析

３.１　登場人物と言語変種の対応について

映画の会話中に出てくる言語変種を、以下の３つに分類する。

（A）ウチナーグチ（沖縄口）

沖縄の伝統方言。映画中では字幕が付いているものはこのウチナーグチとする。

ex）恵達　「ちょーや、なーいーちむんかい、のうさんぐーといーちょーけ（今日は何もしないでゆっくりしていなさい）」

ナビィ「おじぃ、なー、むろくしんのーとんねーすーとんんがらんさー（おじぃ、おかげさまでもう腰は治りました）」

（B）ウチナーヤマトゥグチ（沖縄大和口）

沖縄方言（ウチナーグチ）と標準語（大和口：ヤマトゥグチ）が混ざったものをウチナーヤマトゥグチとする。沖縄の最近の若者が使っている、標準語と沖縄方言の中間的な言葉である。沖縄方言の単語がそのままの形で取り込まれたもの、沖縄方言の形式や意味の影響を強く受けたもの、そして沖縄方言にも標準語にもなく、沖縄方言を素材に若い世代が生み出したものなどがある。

ex）奈々子「ダーが（誰が）婚約者か！」

ケンジ「ワジるな！」

奈々子「アッシェ、フラー！（ばか）」

ケンジ「おじい、危ないよー、座っちょーけー」

奈々子「あのおじぃ、デージ（とても）カッコイイさぁ」

（C）標準語（大和口：ヤマトゥグチ）

（A）（B）以外のもので、沖縄方言が混ざっていないもの。

ex）恵達　「そう、福之助くんは奈々子のことが好きだって言うから連れてきたよ」

福之助「ぼくそんなこと言ってないじゃなないですか」

以上の分類に基づき、登場人物が使用している言語変種を表１にまとめた。表１からは、年配者同士の会話はほぼ（A）の沖縄伝統方言を使っていることがわかる。しかし若い世代の奈々子や本土の人の福之助に対しては（B）のウチナーヤマトゥグチや（C）の標準語を使っている。それに対して若い世代の奈々子、ケンジ、子供たちはすべて（B）のウチナーヤマトゥグチを使っている。このことから、年配者は会話の相手の年齢、出身地によって言葉を使い分け、若い世代は誰に対しても同じ言葉を使っているということがわかる。若い世代は伝統方言のウチナーグチも標準語も完全に習得しておらず、両者の混ざった中間的な言葉を話しているのだと考えられる。

表1　登場人物と言語変種の対応

話し手＼会話の相手	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
①ナビィ		A	A	B	―	C	―
②恵達	A		A	C	―	B,C	―
③サンラー	A	A		―	―	―	―
④奈々子	B	B	―		B	B	B
⑤ケンジ	―	―	B	B		―	―
⑥福之助	C	B,C	―	C	―		―
⑦子供たち	―	―	―	B	―	B	

A:ウチナーグチ　B:ウチナーヤマトゥグチ　C:標準語　―:会話場面なし

一方、ひとくくりにウチナーヤマトゥグチといっても、年配者と若い世代の話している言葉には違いが見られる。そこで、次はこのウチナーヤマトゥグチの使われ方について詳しく見ていきたい。

3.2　ウチナーヤマトゥグチの使われ方

若い世代と年配者のウチナーヤマトゥグチの共通点としては、文末につける「～さぁ」や「～ね」、また感動詞の「あい」などがある。

(1) ナビィ「おばぁもね、アイシテルランドの国って行ってみたいさぁ」
　　奈々子「どうね、気持ちいいね？」
　　奈々子「あい、おばぁ、どこ行くの」

若い世代のほうで、「～しようね」という言葉があるが、これは標準語の使い方と違って「(自分が) ～するね」という意味である。形は標準語にもあるが、文法的な意味は沖縄方言を引き継いでいるため、標準語とは意味にずれが生じている。

(2) 奈々子「じゃぁ、牧場に行って来ようねー」
　　ナビィ「おじぃによろしくね」

次に年配者の言葉の特徴で、人名の後に付ける「～ヒー」というものがある[1)]。これはナビィがサンラーのことを話すときに出てくるものである。

(3) ナビィ「おばぁはサンラーヒーのことをずっとアイシテルさぁ。サンラーヒーと幸せになるさぁ」

このように若い世代と年配者の両方が、沖縄方言と標準語の混ざった中間的な言葉を使っている。しかし、若い世代に比べて年配者のほうは沖縄方言の特徴が少ない。これは会話全体の量もあるのだろうが、若い世代は基本的に言葉を使い分けず、誰に対してもウチナーヤマトゥグチを使っているのに対して、年配者は相手によって言葉を使い分けているために、伝統方言のウチナーグチのとき以外はあまり標準語と変わらない言葉遣いになっているのではないだろうか。

また、年配者の使うウチナーヤマトゥグチは、標準語により近づこうとするものであるために、沖縄方言があまり現れていないのだろう。というよりも、沖縄方言が基盤にあるために、標準語を話そうとしている中に方言の一部が出てきてしまっているというのが､年配者のウチナーヤマトゥグチなのだろう｡それに対して若者のほうは、より自分たちの地元の言葉、沖縄方言に近づこうとするものであると考えられる。標準語が基盤にあり、そこに沖縄方言を取り入れているというのが、若者のウチナーヤマトゥグチといえるだろう｡つまり､ひとくくりにウチナーヤマトゥグチといっても、年配者の使うものと、若い世代が使うものでは、異なる志向性によるものであることがわかる。

また、年配者に標準語を話そうとする傾向があることや、実際に標準語が話せることは、沖縄における標準語化政策の結果であると考えられる。

表2　ウチナーヤマトゥグチに現れる言語形式

若い世代	年配者
・　あい　…おっと、やぁ、おや	・　あい　…おっと、やぁ、おや
・　アガッ　…痛いっ	・　～さぁ　…～さ、～よ
・　アッシェ　…わぁ	・　だぁ　…さぁ（感動詞）
・　～さぁ　…～さ、～よ	・　ちゃー　…いつも、常に
・　～しようね…～するね	・　～ね　…疑問の終助詞
・　ダー　…誰	・　～ヒー　…さん・様(？)
・　デージ　…とても、すごく	
・　にぃにぃ　…兄さん	
・　～ね　…疑問の終助詞	
・　ねぇねぇ　…姉さん	
・　フラー　…ばか	
・　ワジる　…怒るという意味のワジーンから来ている	

３.３　恵達の言葉について

次に、登場人物中で会話量も多く、（A）（B）（C）のすべての言語変種を使っている恵達の言葉の使い分けについて見ていく。

まず恵達は、同年代のナビィ、サンラーと話すときは完全に沖縄の方言（A）を使っている。若い世代の奈々子や福之助と話すときはウチナーヤマトゥグチの（B）と標準語の（C）を使っている。ここで特徴的なことは、恵達はウチナーンチュの奈々子と話す時にもほとんど標準語で話すということである。これは、奈々子が一度東京に行っていた若者だからか、女の子の孫なので、優しい言葉遣いになっているためかと考えられる。

(4) 恵達　「うん、最近はね、子供に話しかけるように花にも話しているんだ」
奈々子「だからきれいに咲くんだよ」
恵達　「で、今度はいつまでいられるんだ」

また、恵達が初めて福之助と出会った時には、ウチナーヤマトゥグチで話している。

(5) 恵達　「にいさん、タバコグヮー持っちょーみ？」
福之助「はい？」
恵達　「にーさん、上等タバコグヮー、吸っちょーや（吸ってるね）」
福之助「はぁ？」

これは、初めて会った人なので、ヤマトゥンチュだということに気づかずに方言交じりの言葉で話してしまったとも考えられる。しかし恵達は若い奈々子には標準語、同年代のナビィには方言を、というように言葉を使い分けている。それなのに若者の福之助に対してわかりづらい方言で話しかけているということは、見知らぬ人に対する警戒心の表れであるとも考えられる。

しかし次第に福之助との会話は標準語に変わっていく。これは福之助がヤマトゥンチュであると気づいたためとも、彼と打ち解けてきたからとも考えられる。

(6) 恵達　「おばぁがうるさくてよ、うちではゆっくりタバコも吸えないんだ」
福之助「そうなんですか」

ここで注意したいのが恵達の使う標準語の言葉遣いである。本土の 70 代、80 代の年配者が話すと予想される言葉遣いよりも優しい表現になっている。

(7) 恵達「奈々子、ナビィはどこへ行ったの」
(8) 恵達「そう、福之助くんは奈々子のことが好きだって言うから連れてきたよ」
(9) 恵達「これ、空を泳いできたの」

これは、私たち本土の人の持っている年配者の話し方のイメージとのギャップによるものだと考えられる。ふつう私たちは祖父や祖母が上のような内容のことを話すと予想するとき、地元の方言交じりで話すことを予想する。そのため年配の男性である恵達が、(7)～(9)のように標準語の、しかも「～の」「～よ」のように若い人の言葉、女性が使うような言葉を使うと違和感を感じ、優しい言葉遣いをしているように感じるのだろう。

また、沖縄の年配者は、ぞんざいな言葉遣いが許される場合は沖縄方言を使用するため、標準語を習得する際に、丁寧でやわらかい表現だけを習得したのかもしれない。そのため、恵達は標準語を使用するとき、上のようなやわらかい言葉遣いをしているとも考えられる。

もうひとつ特徴的なことは、恵達の言葉にはときどき英語が混ざることである。

(10) 恵達「ランチは、トゥエルブ、トゥエンティに届けてくれよ」
(11) 恵達「アフター、ナインティーン、フォーリーファイブ、戦後、一度だけ、ナビィ宛に外国郵便が届いたこともあったよ。差出人も何も書いてなくて、わしは陽にかざしてみたんだ」

これは沖縄の米軍統治時代の影響と考えられる。そして、この恵達の役の俳優登川誠仁は実際に沖縄の出身者であり、またプロの俳優ではないため [2)]、このような英語交じりの言葉遣いは、映画のなかでの過剰演出ではなく、ごく自然なものなのだと考えられる。

４．まとめ

以上のように、沖縄を舞台にした映画の分析を通して、沖縄では会話の相手によって様々なレベルで言葉の使い分けが行われていることがわかった。なかでも年配者と若い世代のウチナーヤマトゥグチのレベルの違いは興味深かった。沖縄の言葉の特殊性から、沖縄の人たち、特に年配者は自分たちの言葉と標準語の関係を外国語同士のように感じているのではないだろうか。それに対して本土の方言話者（特に年配者）は、それほど自分たちの言葉を標準語に近づけようという意識はないと感じられる。ここに沖縄と本土の人の言葉の対する意識の違いが見られる。また、英語交じりの言葉遣いは、戦後の米軍統治時代と現在も続く米軍基地との共存という、沖縄社会の特殊な事情によって生じたものと考えられ、とても興味深いものだった。

今回は、映画という作られた「沖縄」について調べたが、対象にした『ナビィの恋』は、沖縄の実生活に近いレベルの会話がなされていたのではないかと思う。最近では『チェケラッチョ』（2006）や『涙そうそう』（2006）など、沖縄を舞台にした映画が多く作られているが、これらの中では「～さぁ」など、本土の人にもわかる範囲の方言しか使われておらず、それほどリアリティのある「沖縄」になっていないように感じられる。

今後は今回の調査を生かして、舞台が同じ映画でも作品ごとにどう言葉遣いが違うのかなどを調査してみたいと思う。

注

1)この形式は辞書には載っていなかったが、文脈上敬称であると思われる。「様」の意味の接尾辞「－bi」と関わりがあるのかもしれない。

2)登川誠仁は、琉球民謡の歌手で、三線の名手としても知られる人物である。

参考文献

内間直仁・野原三義（2006）『沖縄語辞典－那覇方言を中心に－』研究社

かりまたしげひさ（2006）「沖縄若者事情－琉球・クレオール日本語試論－」『日本語学』25-1　明治書院

国立国語研究所編（2001）『沖縄語辞典』財務省印刷局

高江洲瀬子（2002）「ウチナーヤマトゥグチをめぐって」『国文学　解釈と鑑賞』67-7　至文堂

資料

中江裕司・中江素子（2001）「ナビィの恋」シナリオ作家協会編『'00 年鑑代表シナリオ集』映人社